ペリー来航の裏話

2014年5月20日

「早わかり　江戸時代」
日本実業出版社　P166～167
他

1807年、米国のフルトン
蒸気船を発明

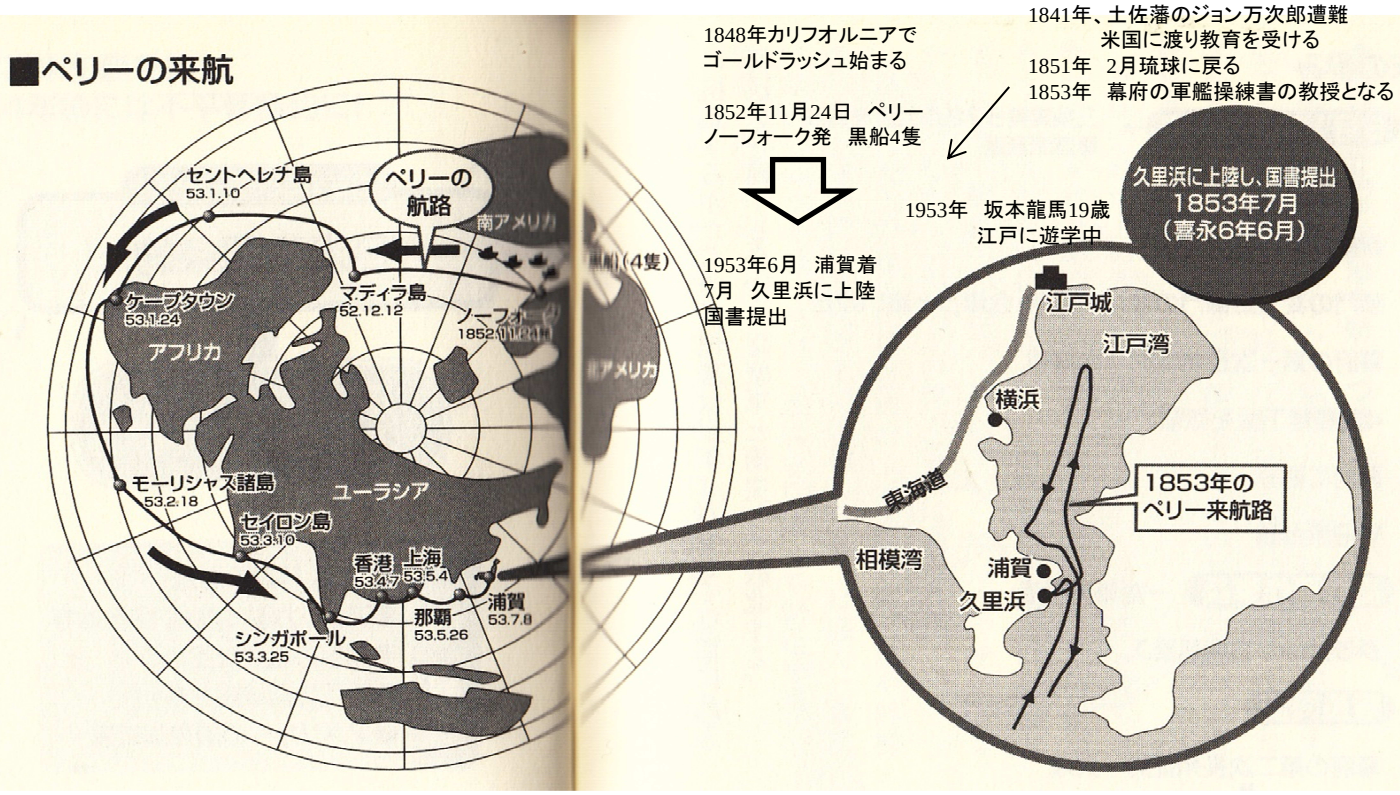
1848年カリフオルニアで
ゴールドラッシュ始まる

1852年11月24日　ペリー
ノーフォーク発　黒船4隻

1841年、土佐藩のジョン万次郎遭難
米国に渡り教育を受ける
1851年　2月琉球に戻る
1853年　幕府の軍艦操練書の教授となる

1953年　坂本龍馬19歳
江戸に遊学中

1953年6月　浦賀着
7月　久里浜に上陸
国書提出



浦賀沖にペリー総督率いるアメリカの黒船4隻が姿を見せたのは、1853年6月のことだった。徳川幕府はペリーの来航を約1年前に知っていた。長崎のオランダ商館長ドンケル・クルチウスが来航前年の1852年4月に幕府に差し出した「オランダ風説書（欧米情報が満載）」に、ペリーという人物が大統領の親書を携えて日本に来航し、開国をせまるだろうと書かれており、具体的な要求条項や黒船の数までもが、正確に記載されていた。

幕政の中心人物である老中の阿部正弘はペリーが来ることを察知し、軍事力を増強（お台場など・・）しようとしたが、財政上の問題で大きく前進しなかった。更に、阿部はペリーがアメリカ本国から武力行使を禁じられていたことをあらけじめ察知していたという。また阿部は日本とアメリカの国力を熟知しており、現状では太刀打ちできないため、平和的解決しか道はないと判断。
あえて無策をよそおい戦争の準備をしなかった。阿部は国書を受け取り、翌年に回答すると約束して、ひとまず日本を去らせた。

翌年の1854年、再びペルーは7隻の黒船（軍艦）で来航、日米和親条約を結んだ。1853年当時、開国に関する大名の意見は、開国30%、攘夷63%、意見なし7%だっという。
1856年にアメリカ合衆国領事のハリスが下田に着任し、通商条約を幕府と交渉し、1858年に幕府大老の井伊直弼が朝廷の許可をまたず独裁で日米修好通商条約を結んだ。その井伊は1860年、桜田門外の変で水戸の浪士たちに暗殺されている。

……

1853年、ペリーが浦賀に来航したとき、土佐藩の龍馬は19歳で江戸に遊学中だった。龍馬はジョン万次郎とも接触があり、アメリカが自由な社会で商売が盛んなことを聞き、世界の中の日本のあるべき姿を考えていた。 土佐藩をこえ日本を意識し始めたのだ。28歳の時に勝海舟に弟子入りし、勝が龍馬を開眼させたと言いますが、そのきっかけはペリーの来航だったのだろう。
勝は龍馬に「知識と人脈」を与えた。龍馬は「開明的思想を吸収」、①「薩長同盟」 ②「船中八作」 ③「大政奉還」という3つの偉業をなし遂げている。

………

土佐藩の半農半漁のジョン万次郎は、1841年に魚に出て遭難、五日半の漂流後、無人島で143日生活。アメリカの捕鯨船に助けられた。その後、米国に渡り教育を受けた。日本への帰国を考え、カリフオルニアのゴールドラッシュを経験、ハワイに渡った。1850年12月17日ホノルルから上海行きの船に乗り、琉球の近くで用意しておいた小舟に乗り移り、1851年2月2日に日本（当時の琉球）に戻ってきた。当初、薩摩藩の英語講師をしていたが、後に生まれ故郷、土佐藩の武士にとりたてられ軍艦教授所の教授英語の教授を歴任した。1853年、幕府に旗本として招聘され豊富な経験を活かし幕府の軍艦操練書の教授になった。1860年、日米修好通商条約の批准書を交換するために遣米使節団（咸臨丸）の一員として船長の勝海舟を助けた。明治になり現在の東京大学の英語教授に任命され文明開化に貢献している。